

長崎大学AP事業の成果報告

長崎大学

太田啓介・喜多まゆ美・北村史・中島ゆり・若菜啓孝

1 長崎大学 AP 事業のねらい

本学のAP事業では、現代的テーマの科目群からなるモジュール型教養教育（全学出動体制）を標的としてアクティブ・ラーニング（AL）型授業の推進、およびDPに基づく一貫した教学マネジメントシステムの構築にあたり学修成果の可視化のためのツールやシステムを開発した。（下図参照）



図：長崎大学APの概略

2 学修成果の可視化のためのツール開発と DP にもとづく教学マネジメントシステムの構築

学修成果の可視化ツール（授業アンケート、学修状況報告、コンピテンシーテスト）の設計においては、その開発に先立って、DPにもとづく能力基準となるルーブリックを開発した。この能力基準とそれを評価するツールを軸として、大学の教育改善、教員の授業改善、学生の学修改善が循環的に進むためのシステムが構築できた。具体的には、教員の授業改善については、AL型授業方法、DPとの関連付け項目などの追加・システム改修を行い、「学習者の省察を促す」形式に改変した可視化ツールらの結果との照合を可能とし、授業改善に参考になるものとした。また、学生の学修活動の改善に際しては、学修成果を蓄積していく学修ポートフォリオの再設計を行い、自己の学修活動について省察できるものとした。また、授業外学修時間の正確な把握のために、生活時間調査法を用いたより詳細な調査の結果と同等の精度で把握できるようにしたこと、DPに基づくかたちで評価し学部の特徴が把握できるように独自のコンピテンシーテストを開発したことがあげられる。

3 アクティブ・ラーニング（AL）の推進

AL型授業の開発・進化・普及を推進するために、授業アンケート、学修状況報告の調査結果等を分析し、ニュースレターおよびHP上での報告、授業支援ツール（ティップス）の開発さらにFD講習会を繰り返し実施した。その結果、学部教育に関わる教員への授業実践に関する実態調査においては、回答者の多くが、このAP事業期間中に「授業方法に変化があった」と回答しており、AL型の授業実践に関して浸透がうかがえた。学生に対しても、「長大生のためのラーニングティップス」や「長大生の自立的な学びの仕組み」を作成し配付することで、学び方の基礎や自身の学びを省みながら自己調整するための仕組みを伝えた。

4 今後の方針

AP事業に牽引されて再構築してきた全学的な教学マネジメントシステムが運用されるようになったことで、大学が一体となって教育改善に向かう際の軸が強固になったが、継続的にPDCAを回し、さらに教育活動の質を向上させていく必要がある。